

四十七人の刺客

新潮社



新潮書下ろし時代小説

四十七人の刺客

池宮彰一郎



●新潮書下ろし時代小説
しじゅうしちにん
四十七人の刺客

著者 いけみやしやういちろう
池宮彰一郎

発行 一九九二年九月一五日

五刷 一九九二年二月五日

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 営業〇三(3266)五一一一 編集〇三(3266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 錦明印刷株式会社 製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。



目次

料 謀 夏 掩 始 卯 見 旋 颶 春 雪 秋
計 計 解 擊 計 波 敵 回 風 の 雷 釣 時
敵 二 解 擊 計 波 敵 回 城 雷 釣 雨

215 195 179 161 145 121 105 87 59 41 25 7

あ と が き	寒	風	虎	分	目	呼	吾	行	詭	凍	野
		蕭	落	合		子	亦				
	鳥	々	笛	為	睫	笛	紅	春	道	蝶	分
				変							

436	419	409	397	373	355	333	309	295	275	259	231
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

装画・西のぼる

四十七人の刺客

秋時雨あきしぐれ

一

昼すぎ、大石内蔵助の一行が、藤沢宿の外れ遊行寺ゆぎょうじの坂下にさしかかるころは、さわやかな日和ひよりだった。

元禄十五年（一七〇二年）十月二十二日――。

この年は閏年うるすのため、八月が二度あった。それでも新暦では十二月初旬に当る。秋日和とはいっても、風は初冬の冷たさを伝えていた。

東海道を江戸に下ると、道は遊行寺坂手前で左に曲る。直進すれば片瀬、江ノ島に向う。その曲り角の茶店で一行を待ちうけていた浪人態の侍が、つと店を出て目礼すると、先に立って歩きだした。江戸組の富森助右衛門であつた。

遊行寺坂下の板橋を渡ると、一行は富森助右衛門に従って川沿いの小道に入った。片瀬川沿いに三、四町歩いて、鎌倉大仏道に入る。

一行は内蔵助のほか、吉田忠左衛門、小野寺十内、不破数右衛門、それに若手の吉田沢右衛門、小野寺幸右衛門、足軽の寺坂吉右衛門の六名であつた。沢右衛門は忠左衛門の倅、幸右衛門は十内の養子である。

道は刈田の中を通り過ぎ、大仏切通しまでの長い坂道にさしかかった。山ひだに沿った坂を登ると、前方から切出したばかりの大丸太を積んだ車と出合った。木の香生々しく、切り口は水を含んでいかにも重そうである。輕轆の音と挽子の荒い掛け声が入り交る。

内蔵助は、一行に道をよけさせた。

「済みませんのう、ごめんなすって」

道端の草を踏んで立った内蔵助は、身近の小野寺十内に囁きかけた。

「木を積める、くるまのきたれば、かた寄りて……通さしめつつ……山みちのぼる……とは、どうかな」

歌道に堪能な十内は、口のなかでくり返してみても、にこりと頷いてみせた。

「ご家老は、かまえぬ時のほうがよい歌を詠まれますな」

「そうかも知れぬ」

道に戻りながら、内蔵助は微笑した。

「歌はつくるものではない、ふいと心に浮ぶものだというおぬしの持論が、この頃、ようやくわかりかけてきたようだ」

坂道に足を踏みだしながら、内蔵助は続けた。

「物事というのは、慣れて呼吸がわかる頃に終りを迎えるようだ。年内、あとふた月あまり、歌詠む余裕が何ほどあるか……ちと心許ないな」

「やはり……年内、とお考えですか」

十内は、うって変った緊張の色で囁いた。

「のう、十内よ。これは相手あつての企てだ。仕掛けるこちらにも必死なら、防ぐむこうも必死……年が変れば状況が変る。この一年八ヶ月、はかりにはかった計略を戦さにもちこむのは年内が限度だ」
内蔵助は眉を上げて、流れる雲脚を眺めた。

晩秋の空はうつろい易い。

大仏切通しを下つて、長谷、小町を通り、雪ノ下の宿に着く頃は、陽は翳っていた。

宿は、遊山客相手の明石茶屋という料理茶屋で、求めに応じて客を泊める。江戸の同志四名が、一行を出迎えた。奥田孫太夫、堀部安兵衛と、説明役を命ぜられた潮田又之丞、前原伊助である。

旅装を解いた一行は、茶を啜っただけでくつろぐ間もなく、広間に集った。

数日の滞在を予定したこの明石茶屋は、奥田孫太夫が用意した。借切つてほかに客はいない。店の者も身許確かな者に限り、一季半季の奉公人は休みをとらせた。

それでも用心のため、吉田沢右衛門・小野寺幸右衛門と、寺坂吉右衛門を、廊下と庭先の見張りに立たせた。

「……では、始めようか」

内蔵助の前に、たたみ一畳分に余る絵図面がひろげられた。もと絵図奉行だった潮田又之丞が、半月あまりかけて描いた図面である。

江戸組は、個々に実状を見分しているが、こうして全貌の集約された図面を見るのははじめてであった。

上方組の者は言うまでもない。一同は身を乗り出して視線を集中した。

その誰もが、愕然と色を失なつた。

「これが、これが吉良の新屋敷だと？」

一年八ヶ月の長きにわたつて、虚々実々の謀攻をほどこし、いま漸く討入の機を迎えようとしている宿敵吉良上野介の屋敷の詳細な見取図が眼前にある。

「な、何だ、これは……」

小野寺十内が、呻くように声を發した。

「これは、武家屋敷ではない」

吉田忠左衛門のその言葉に続いて、不破数右衛門が吐息をついた。
「さよう……：そうと見せかけているが、これは合戦用の城砦ですぞ」

昨元禄十四年九月、江戸城外郭の内、呉服橋御門内より、大川をへだてた北本所たて堅川一ツ目之橋通り、無縁寺（回向院）裏（後の本所松坂町）に屋敷替を命じられた吉良上野介は、年内二ヶ月余をかけて前住者松平登之助の屋敷を改築した。

それが、年が明けるやいなやあらためて屋敷の新築を願ひ出て、改築したばかりの屋敷を跡形なく打ち毀し、八ヶ月余をかけて大々的な新築普請を行なった。

その資材は、すべて吉良の血縁の米沢上杉家の国許で調えられ、大工・左官から人足、飯炊き女まで米沢者を雇ひ、江戸者は一人も採用しなかった。

徹底した機密保持の下で施工された吉良新屋敷の全貌が、いま、余すところなく図面に描かれている。

敵は、赤穂勢の来襲を予測し、万全の備えを構築した、といえよう。
万全——。

その一語の持つ重さときびしさを、一同はあらためて思い知らされた。
肌粟を生ずる一同の中で、内蔵助は先を促がした。

「詳細を聞こう」

潮田又之丞は、調べ書しがきを取り出した。

吉良上野介新屋敷

敷地総坪数 二千五百五十坪（約八四六二平方米）

表門側（東） 延尺三十四間二尺八寸余（約六二・七米）
のべしやく

外 五間道路（約九・一米）

向側 旗本牧野長門守屋敷

裏門側（西） 延尺三十四間四尺八寸（約六三・六米）

外 五間道路

向側 無縁寺塔中、大徳院

横手（南） 延尺七十三間三尺七寸（約一三四米）

外 七間道路（約一一・七米）

向側 町屋（本所相生町二丁目）

横手（北） 延尺七十三間三尺七寸（約一三四米）

堀外隣家 旗本本多孫太郎屋敷

同 土屋主税屋敷

敷地の三方（東・西・南）は、表裏門とその門番小屋のほかは、すべて総二階の侍長屋が建てられている。

侍長屋 総延尺 百三十三間余（約二四〇米）

総平坪 四百二十六坪（約一四一〇平方米）

総建坪 七百三十坪（約二四一三平方米）

戸数 およそ四十五戸、ほかに小屋敷五戸、馬屋

本屋敷（平屋建） 総建坪 三百九十坪（約二二九〇平方米）

部屋数 約七十

「待て」

吉田忠左衛門が潮田又之丞の説明を制した。

「まず敵の数を勘定しよう、上杉の手勢がいかほど駐留できる」

富森助右衛門が答えた。

「一戸あたり侍二名、身の廻りの世話する小者は別として、ざっと九十から百名でしょう」

「それと、本屋敷に寝泊りする吉良の家来がざっと三十」

と、堀部安兵衛がつけ加えた。

「吉良の家来の半数は実戦に役立つまい、固いところ侍数は百十から十五」

「いや、はばかりながらこちらにも^{よわい}齡五十を越える者、はたちに満たぬ者が十人あまり……真に頼みとする戦い手は、三十三……ざっと三倍半の敵勢です」

奥田孫太夫の意見に頷いた内蔵助は、先を促がした。

潮田に替って、前原伊助が膝をすすめた。

「武家屋敷をよそおっているのは、表庭から玄関、控部屋、書院までで、その先の部屋部屋はそれぞれ砦として使えるよう、備えております」

惣代物見（偵察長）の前原伊助は、金奉行十石三人扶持の輕輩だったが、内蔵助の裁量で吉良屋敷横手の相生町二丁目の米屋を居抜きで買い受けた店を取り仕切っている。

吉良屋敷とは七間の道路をへだつのみである。発覚を当然の事と予測し、掘抜き井戸の櫓を立てて新築工事を俯瞰した。

その大胆不敵な行動力をかわれて、物見の惣代に推された。

前原が示す部屋部屋は、頑丈な板壁に囲われ、分厚い板戸の外廊下は角々に仕切り格子を設け、床

に段差をつけて突進をさまたげる。

「お氣付かと思いますが、この屋敷には上野介の住む奥座敷のほか奥向の住居が無い。奥が無ければ女は住めず、女の奉公人もおりません」

奥田孫太夫が、そう指摘した。

「すると、吉良殿の奥方は……？」

と、十内が問いかけた。

「お実家の上杉家中屋敷、白金台にとどまって、本所のこの屋敷に入る氣配も示しません」
「さもあるう、この戦仕立では居るところがあるまい」

本屋敷は思いきって北隣の旗本屋敷に寄せて建てた。

広くとった庭が攻防の要となる。

見せかけの表庭を越え、土塀が複雑に入り組んで、幅一間ほどの通路が迷路を作っている。

塀は要処に狭間（矢を放つ穴）を作り、内側に踏み板を設け、攻め手を頭上から拳下りに突き伏せ。迷路の溜り場には底にそぎ竹を植えた落し穴、鹿砦や木盾なども怠りなく配置している。

土塀を乗り越え乗り越え進むと、水濠にぶつかる。水かさは胸まである。

向う岸は、高さ三間もあろうという木柵が立ちふさがっている。

裏門側も陣地はそう変らない。土塀が多少簡略化されているが、水濠が幅広い。

水濠は、屋敷のもっとも奥まったあたりの庭さきにある深い泉水池とつながっている。池の水はおそらく前住者が豎川から暗渠で引込んだものの、その辺が吉良の住居と思われる。

さらに一同を叩かせたのは、大屋根の備えであった。

屋根の各所に、風呂桶ほどの貯水槽がある。仕掛の綱を引くと湛えた水は一挙に落ちる。

攻め手に凍水を浴びせる備えか。

大屋根に丸太を積み上げ、木櫓きぐらの橋を土塀の迷路の上に架けてある。

これも頭上から攻め手を叩き潰すため、と見えた。

そぎ竹を植えた盾、真竹を敷きつめて足を這らせる一部分の通路、獣狩りの罟、雑多な仕掛は数えるときがない。

「屋敷の普請が終り近くなった八月末の頃でした」

前原の実見談に、一同は耳を傾けた。

「奥まった泉水のあたりに、連日かなりの量の新しい土が運び出されました」

「運び出す？ 建物の中からか？」

「そうとしかみえませんでした。庭土とは違う褐色の土で……」

「褐色の土……？」

限られた敷地の中で、違う色の土がどこから出たか。

褐色の土に何の意味があるか。

不審はその点に集まった。

と——不破数右衛門が、ぼつりと一言洩らした。

「抜け穴……かも知れぬ」

「なに、抜け穴だと？」

一座が色めきだった。

「そうだ！ 褐色の土は地面の深い底から出たのだ！」

「吉良め……最後の逃げ道を用意したのだ、どこへ抜ける」

先を争うように、数本の手指が奥庭のあたりを辿る。

「泉水の下は避けるだろう、するとこの方角か……」